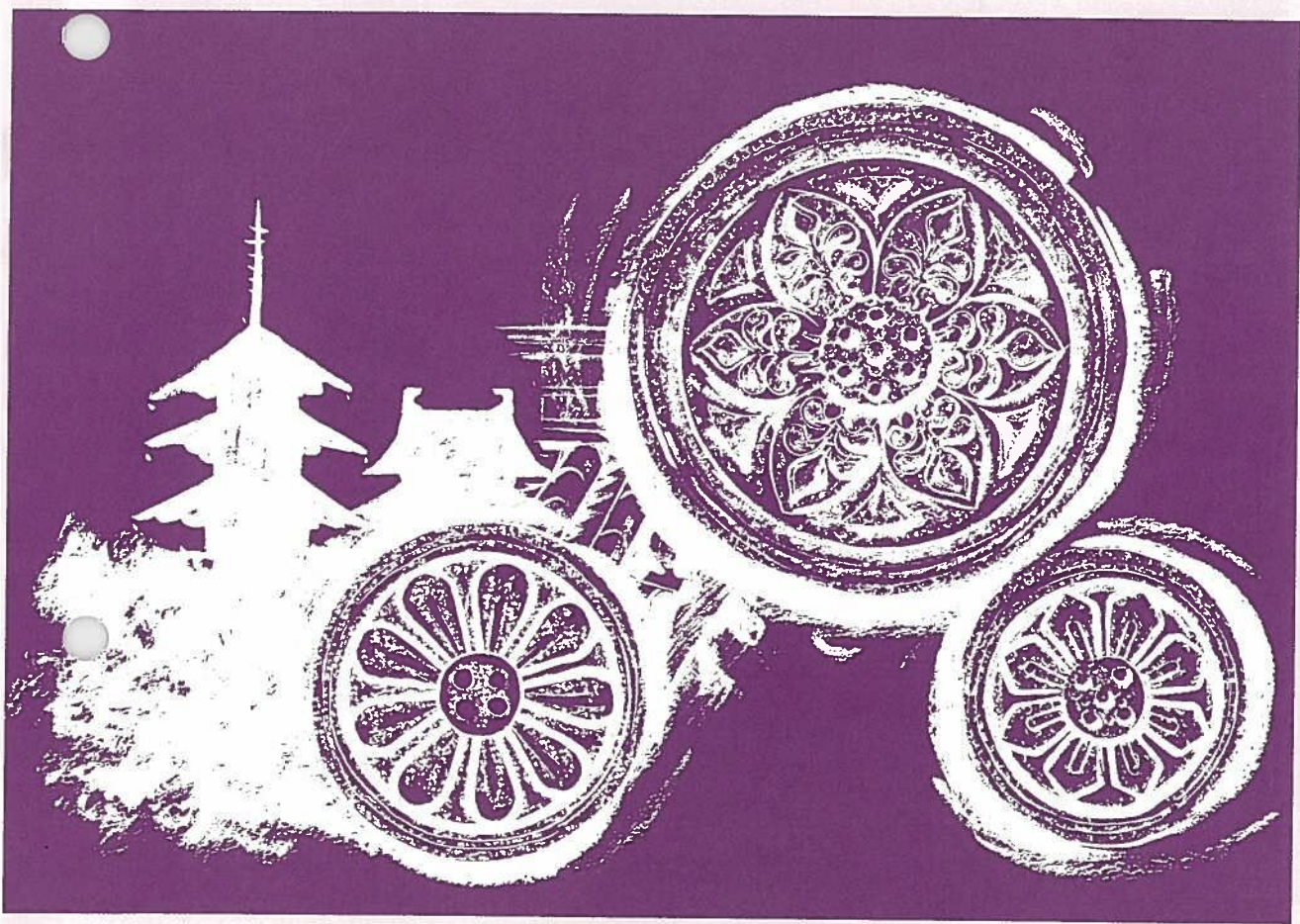


尾張元興寺跡

第5次調査の概要



1992

名古屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、名古屋市中区正木四丁目に所在する、尾張元興寺跡の発掘調査の概要報告書である。緊急的な調査ではあったが、今回の調査を第5次調査とした。
2. 発掘調査は、平成 3年 5月13日から平成 3年 5月31日まで行った。対象面積は、約130 m²である。
3. 調査は名古屋市教育委員会が実施し、文化課学芸員小島一夫（5月13日から20日まで）、見晴台考古資料館学芸員川合剛、服部哲也、尾野善裕（5月20日から31日まで）が担当した。
4. 調査の実施及び本書の作成にあたっては、下記の方々の協力を得た。記して謝意を表する（敬称略・順不同）。
北條献示（稲沢市教育委員会）・土本典生（一宮市教育委員会）・岩花秀明（国府町教育委員会）・磯谷祐子（各務原市教育委員会）・河内一浩（羽曳野市教育委員会）・梶山勝（名古屋市博物館）・斉藤孝正（文化庁）・斉藤理・内山伸也・伊藤聡（以上愛知学院大学）・脇田朋美・中野いづる・神谷悦子・前川誠・廣田進悟・伏見金生（以上中京大学）・寿楽寺・伊藤厚史・福田直子・佐々木佳子・吉田裕子
5. 出土遺物・記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
6. 本書の編集・執筆は、担当者の協力をえ、服部が行った。

目 次

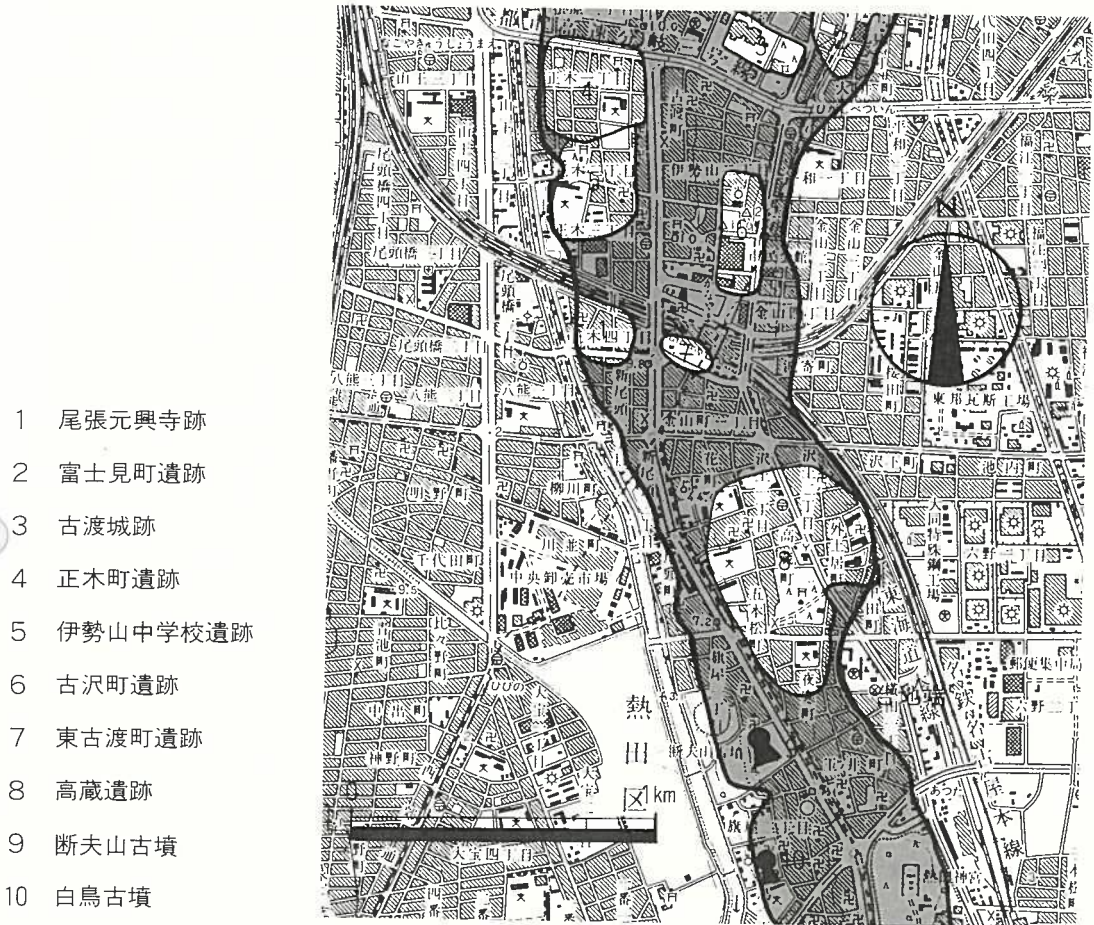
I. はじめに	1～ 2
II. 調査の概要	
1 遺構と遺物	2～ 5
2 瓦について	6～23
III. まとめ	23～25
写真図版	

I. はじめに

位置と環境 尾張元興寺跡は名古屋市のほぼ中央、金山総合駅西約400mに位置する。周辺は交通至便の住宅地、商業地として、マンションやオフィスビルが立ち並んでいる。地形的には、市内中央部に展開する洪積台地のうち、半島状に突出する熱田台地の西端縁に立地し、低地を広く望む。標高は7~10mである。

遺跡の概要 遺跡周辺は、古瓦の散布地として古くより知られていたようで、寛政8年(1796年)瓦礫舎作成の『古瓦譜』には既に出土瓦の拓本が載せられている。

学術的な現地調査を行ったのは、昭和初期の石田茂作が初めてである^①。石田は、調査当時の元興寺と泰雲寺の両所有地域を往時の寺域と推定し、出土の古瓦の年代観から、飛



第1図 位置及び周辺の遺跡(国土地理院2万5千分の1使用)

鳥時代から平安（藤原）時代の隆盛と報告している。ただし、土壇・礎石の残っているものは一つも無い、とも紹介しており、当時すでに伽藍の痕跡を地上から伺うことはできなかったようである。

太平洋戦争後、ようやく発掘調査が実施されるようになり、土器類・瓦類の資料は飛躍的に増加した。しかし、それぞれが小規模調査であったこともあり、伽藍に関連する遺構は検出できていないまま現在に至っている。

周辺の遺跡（第1図） 熱田台地上には多くの遺跡が立地するが、特に尾張元興寺跡の周辺に集中している。北には古墳時代以降の集落跡と考えられる正木町・伊勢山中学校の両遺跡。東に古墳時代の墓が出土した東古渡町遺跡。南に弥生時代前期からの集落跡高蔵遺跡、東海一の前方向後円墳断夫山古墳と、どの遺跡ともその関連が大いに注目される。まさに初期寺院建立にふさわしい地と言えよう。

調査に至る経過 平成 3年 4月、設計・施工業者である多胡設計事務所より、尾張元興寺跡内で「笹とみビル」建設の予定がある旨申し入れられた。文化課では、発掘調査の必要を指導するとともに、すぐの対応が不可能である説明を行った。しかし、事業者側から早急な調査を強く要望されたため、とりあえず 5月 2日試掘調査を行った。その後、試掘の結果と打ち合せにより、建物の基礎部分のみを調査の対象とし、5月13日から31日までの日程で行うこととなった。

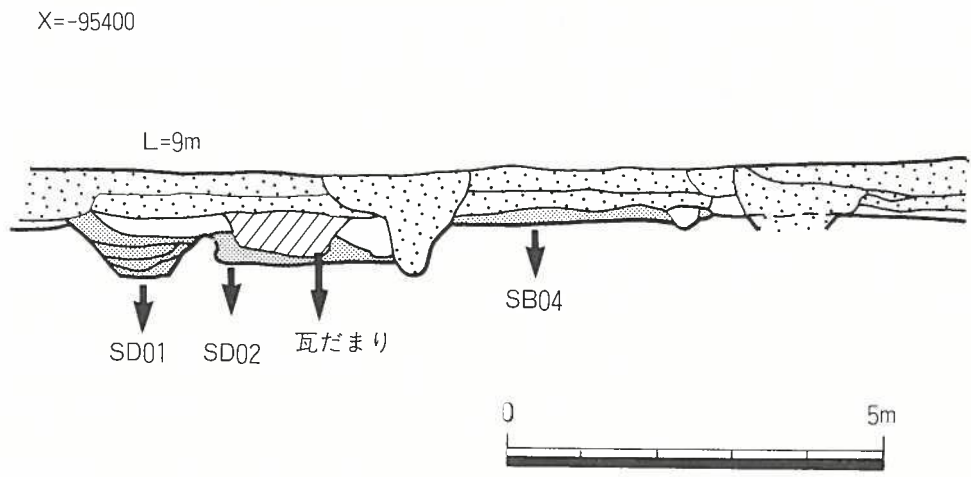
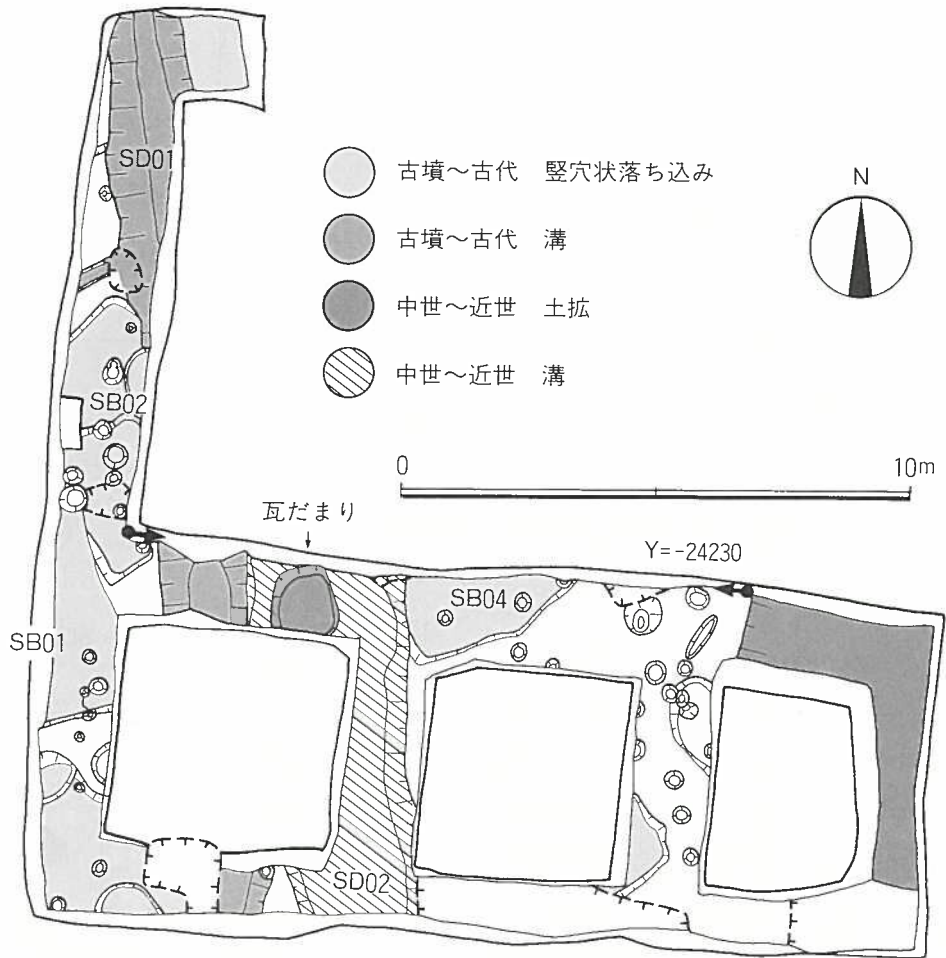
註

- ① 余談ではあるが、この『古瓦譜』掲載の元興寺出土パルメット文軒丸瓦には「河内国野中村野中寺ト同製」と付記されており、おおいに驚かされる。
- ② 石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936年
- ③ 名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第I次発掘調査概要報告書』1985年
名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第II次発掘調査概要報告書』1985年
名古屋市教育委員会『尾張元興寺遺跡発掘調査報告書』1985年
名古屋市教育委員会『尾張元興寺跡第IV次発掘調査概要報告書』1986年

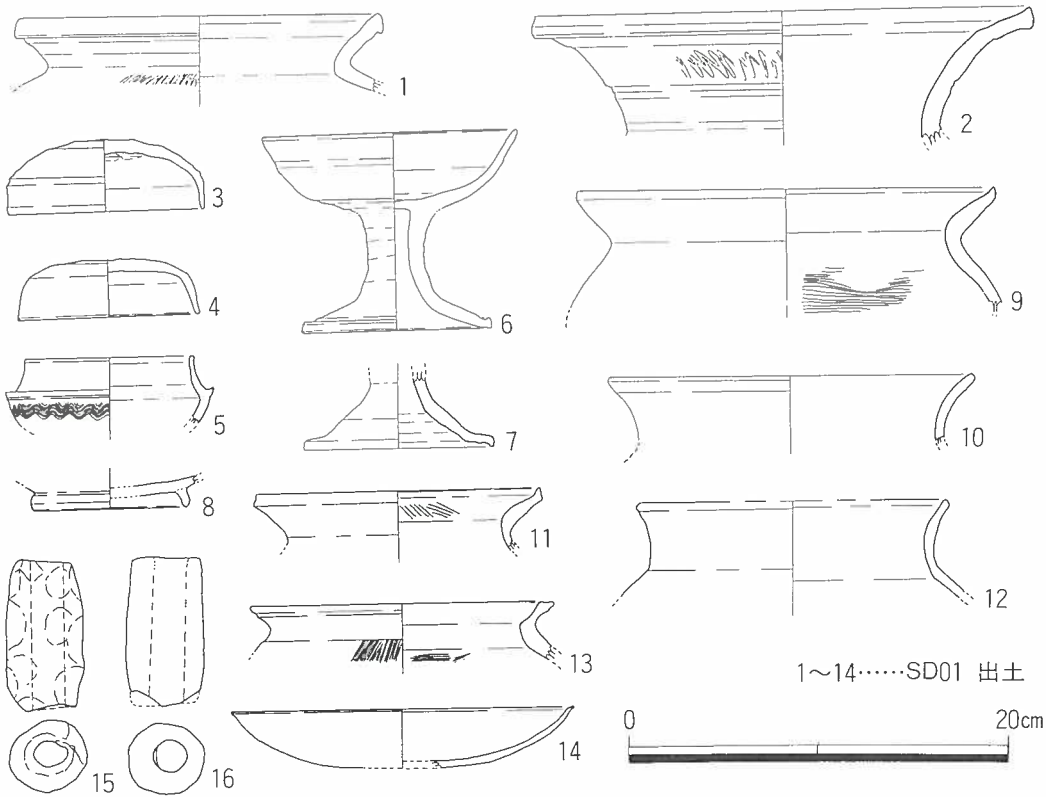
II. 調査の概要

1. 遺構と遺物

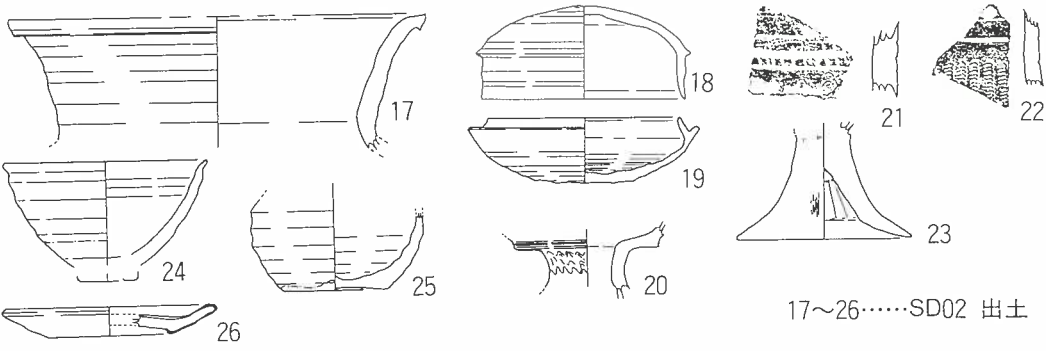
トレンチ状の変則的な調査区となったため、検出した遺構も断片的であり形状・時期の不明なものが多い。出土遺物も土器類は破片がほとんどで一括資料はないが、瓦類のみ多量に出土しているため別に述べる。



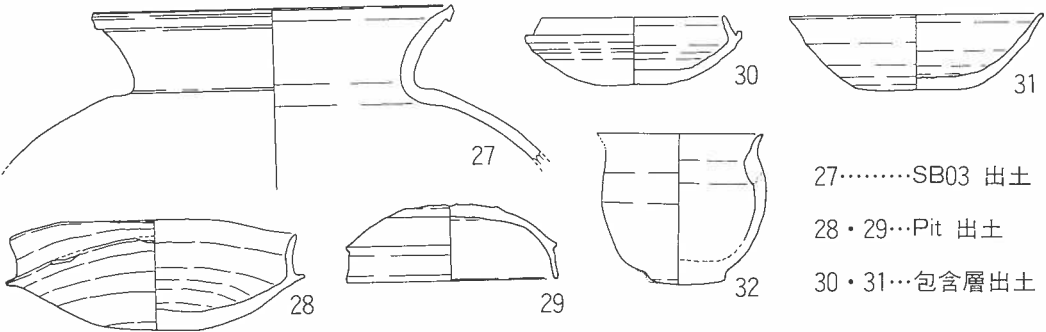
第2図 遺構図 (平面1:150・断面1:100)



1~14……SD01 出土



17~26……SD02 出土



27……SB03 出土

28・29……Pit 出土

30・31……包含層出土

第3図 出土土器類 (1:4)

古墳時代～古代

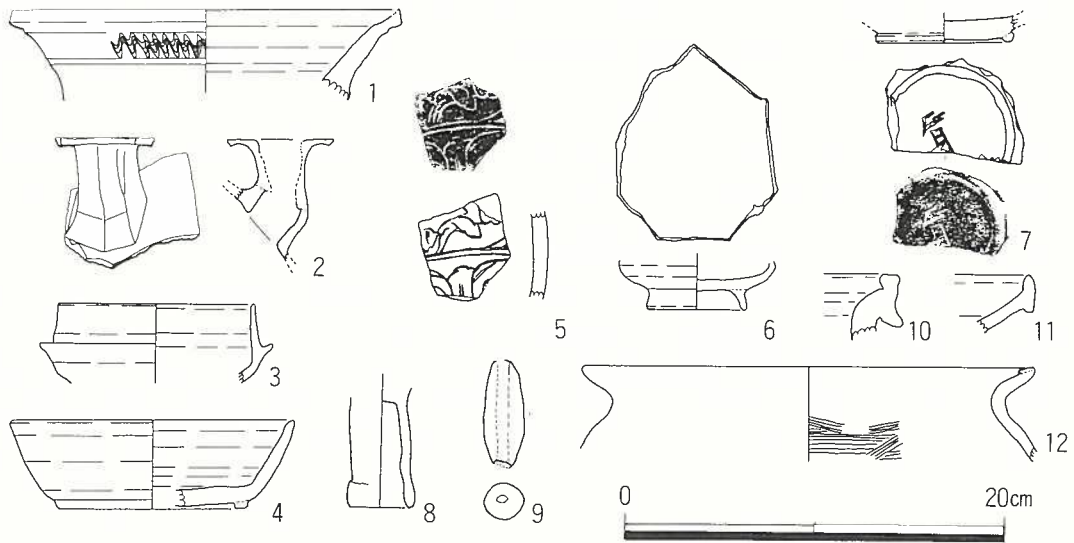
竪穴状落込み（S B01～S B06） 10～20cm程の浅い落込みを6ヶ所で検出した。方形のプランになるようであり竪穴住居とも考えられるが、支柱穴や壁溝・炉等是不明である。埋土は暗褐色土が堆積する。出土遺物には土師器・須恵器（第3図の27など）があるもののすべて破片であり、時期の決定は難しい。

溝（S D01） 調査区西で検出した南北溝で、竪穴状遺構を切っている。幅1.5～2m、深さ約0.7mを測り、基本的に暗褐色土一層が堆積する。埋土中からは土師器（第3図の9～14）・須恵器（1～7）・灰釉陶器（8）・土錘（15・16）・瓦等の、古墳時代から古代の遺物が出土した。

中世～近世

溝（S D02） 調査区中央で検出した南北溝。幅2.5～3m、深さ0.6～1mを測り、褐色土と暗褐色土が堆積する。埋土中からは土師器（23）・須恵器（17～22）・瓦の他、中世末～近世初頭の陶磁器類（24・25）も出土しており、埋没もこの時期に考えられる。

土壇（瓦だまり） S D02を切る。形状・規模は不明であるが、幅1.7m、深さ0.6mを測る。廃棄された多量の瓦礫の中に、ヘドロ状の暗灰褐色土が僅かに入る状況である。遺物は古代の瓦類の他、弥生土器から近世初頭の陶磁器類まで幅広い時代の破片が出土している。多量の古代瓦も近世初頭の二次的な廃棄と考えられる。第4図に示した土器類は、須恵器（1～4、2は多口瓶）・緑釉陶器（5線刻花文器種不明）・灰釉陶器（6耳皿・7「正月」線刻）・製塩土器（8）・土錘（9）・常滑甕（10）・鑄釉擂鉢（11）・土師器鍋（12）である。

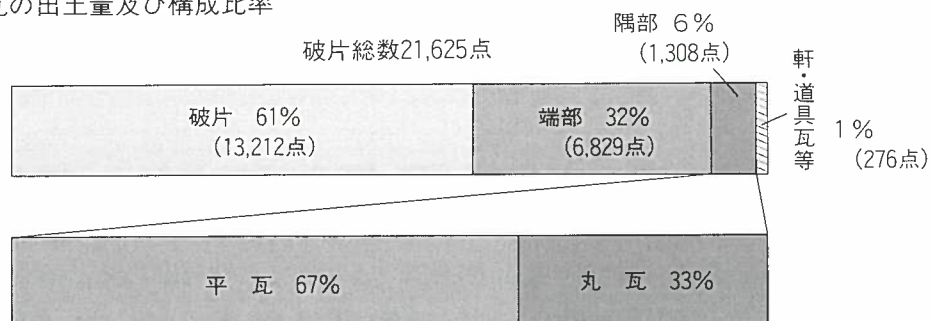


第4図 瓦だまり出土土器類（1:4）

2. 瓦について

今回調査では、コンテナケース約300箱の瓦片が出土し、総遺物箱数の約97%を占めた。ただし、そのほとんどが細片であり、包含層から出土した丸瓦の完形1点を除けば二つの隅部が残った瓦も無い。分析にあたっては、平・丸瓦については前述の瓦だまり出土の隅部資料を中心に、その他の瓦類についてはすべての破片を対象とした。以下、概略を述べる。

表1 瓦の出土量及び構成比率



平瓦

<観察>

成形 桶巻作りと一枚作りが存在する。一枚作りの可能性があるものは凸面縄タタキに限られる。

桶・成形台 確認できた杵板痕は幅 3cm～5cmを測り、綴痕は認められない。細片のため、桶の復元は不可能である。又、一枚作りは、布をひいた凸面台で成形し、後にハナレ砂をひいた凹面台に乗せて調整、の製作手順が推定できた。凹面・凸面2種類の成形台を考えたい。

粘土板・粘土紐 桶・成形台へは、板状の粘土が用意されている。1点のみ、紐状粘土の痕跡を観察できる資料(第6図3)があったが、補足粘土の可能性もあろう。凸面タタキ別の厚さの平均は19～21mmであり、顕著な差は認められない。

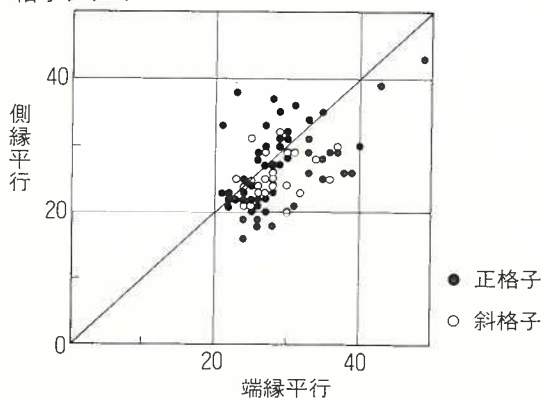
分割 分割突帯による溝(分割界線)を残す瓦は15点(？を含む)確認した。凸面タタキ別では、縄タタキ1点の他は格子・平行タタキであった。

布目の細粗 3cm四方を計測した。端縁平行と側縁平行を較べれば端縁平行が密である。凸面タタキ別の密度は表2のとおりで、縄タタキでハナレ砂のある瓦のみ目の粗い布を使っていることが分る。

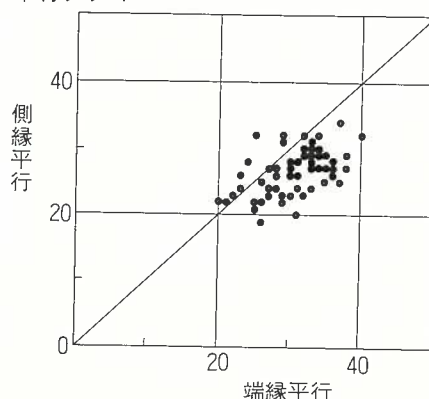
タタキ板 刻線のタタキ板と縄巻きのタタキ板に大別できる。更に、刻線タタキでは平行・斜格子・正格子に。縄巻タタキ板では側縁に平行に叩くものと、弧状(叩き締め)の円弧

表2 平瓦凹面布目密度

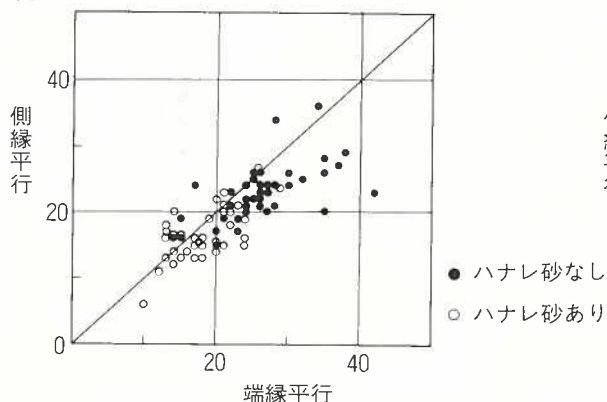
〈格子タタキ〉



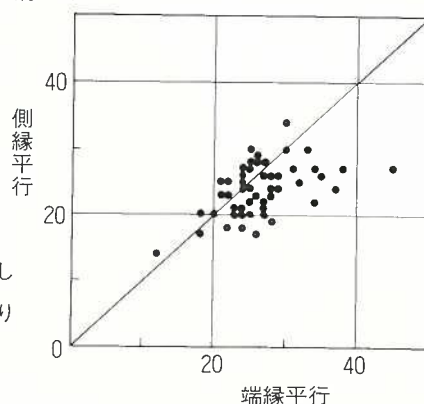
〈平行タタキ〉



〈縄タタキ〉

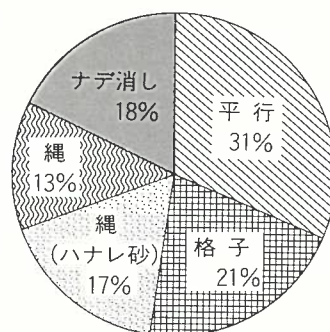


〈消し〉



か) に叩くものに分けられ、前者の多くには縄目を潰してハナレ砂が付着している。各比率は表3のとおりである。この他、異なるタタキ板による重複タタキの例(第5図6~9)や、正格子に花文を彫り込んだ特殊な刻線のタタキ(第17図1~5)も若干存在する。凸面調整 凸面のタタキ目をナデやヘラケズリ(1点のみ)によって消すものもある。丁寧に完全に消すものとはそうでないものがあり、ナデは多くが横方向に、ヘラケズリは縦方向に施されている。

表3 平瓦凸面タタキ別比率



凹面調整 凹面の調整は行わないのがほとんどであるが、凸面縄叩きでハナレ砂の付着する瓦だけは凹面の布目が潰れている。板状の圧痕による潰れと観察できるが、布目を消す意図は見られず、凹面調整の痕跡かどうかは不明。又、凹面にもタタキを施す例が僅かに存在する(第6図



1. 凸面格子タタキ 4. 凸面縄タタキ
 2. 凸面平行タタキ 5. 凸面縄タタキ(ハナレ砂あり)
 3. 凸面ヘラケズリ 6~9. 重複タタキ

0 20cm

第5図 出土平瓦 その1 (1:4)

1・2) が、いずれも補助的な叩き締めと考えられる。

側・端面の削り調整 側・端面とも、面全体及び面と接する凹面側を調整するものが多い。

焼成 須恵器と同質の瓦は平行・格子タタキが、表面が黒く焼けた瓦質の瓦は平行タタキが、赤褐色の瓦は縄タタキ(ハナレ砂なし)がそれぞれ多く、特徴的である。

<分類>

以上の観察をもとに分類を

行うが、桶巻き作りか一枚作りかを大区分とし、凸面タタキ別を細区分とすることが最も妥当と思われた。以下の5分類とした。

I 桶巻き作り・平行タタキ II 桶巻き作り・格子タタキ III 桶巻き作り・縄タタキ (ハナレ砂なし) IV 桶巻き作り・タタキ目ナデ消し V 一枚作り・縄タタキ (ハナレ砂あり)
丸瓦

<観察>

形状 行基葺と玉縁付がある。玉縁付はごく僅かであり、破片を含めても19点にすぎない。

又、玉縁付でタタキ目の確認できたものはすべて縄タタキであった。

成形台 丸太状の木型と枠板綴りの桶型とがある。桶型は50点ほどを確認したが(第7図6・第8図など)、更に増加する可能性もある。尚、玉縁付で確認できたものはすべて木型であった。

粘土板・粘土紐 すべて板状の粘土を型に巻きつけるもので、粘土紐の例は無い。厚さの平均は19mmである。

布目の細粗 3cm四方を計測した。平瓦は端縁平行が側縁平行より密の傾向にあったが、丸瓦では読み取れない。凸面タタキ別の密度は表5のとおりである。

タタキ板 平瓦と同様に、刻線のタタキ板と縄巻きのタタキ板に大別できる。ただし、表6のようにタタキ目をきれいにナデ消してしまう瓦が約70%を占めており(タタキ目の確認できた例でも、ほとんどがナデ消すことを志向している。これを含めれば丸瓦総数の約

表4 出土平瓦の特徴(基本)





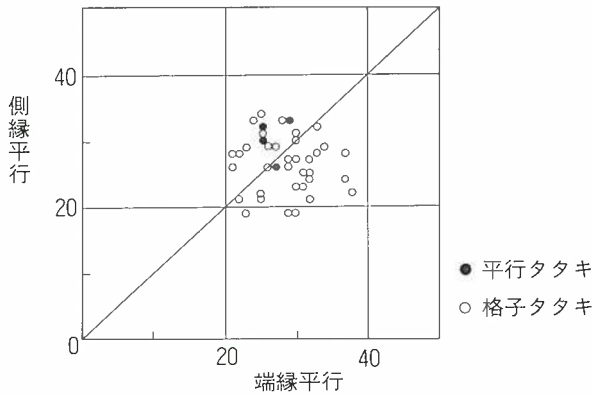
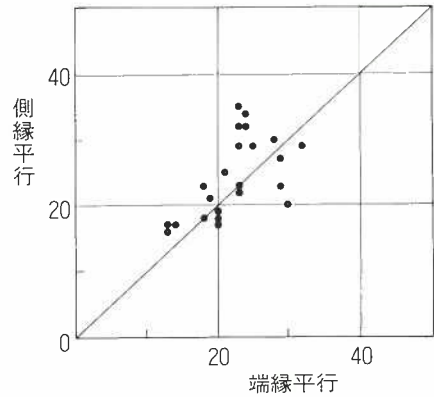
型式	凸面タタキ	凸面調整有	凹面調整	布目数(平均)		側面形状	端面形状	厚さ(平均)	焼成	外面色調	胎土
				側平行	端平行						
I	平行	11%	なし	26	30			19mm	軟	暗灰	密
II	格子	47%	なし	26	29			19mm	良	灰白	密
III	縄	40%	なし	22	25			21mm	良	灰	密
IV	消し	100%	なし	24	26			21mm	良	灰	密
V	縄砂	砂圧痕	板状圧痕	17	18			20mm	良	灰白	密

表5 丸瓦凹面布目密度

〈格子・平行タタキ〉



〈縄タタキ〉



〈消し〉

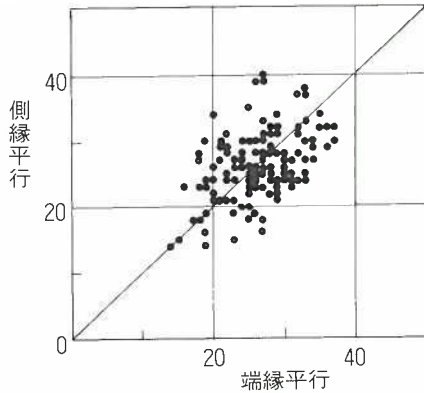
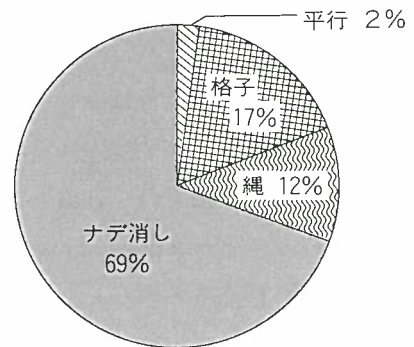


表6 丸瓦凸面タタキ別比率



90%がタタキ目ナデ消の瓦となる)、更なる分類は有効でないと思われた。尚、重複タタキや花文タタキの例はない。

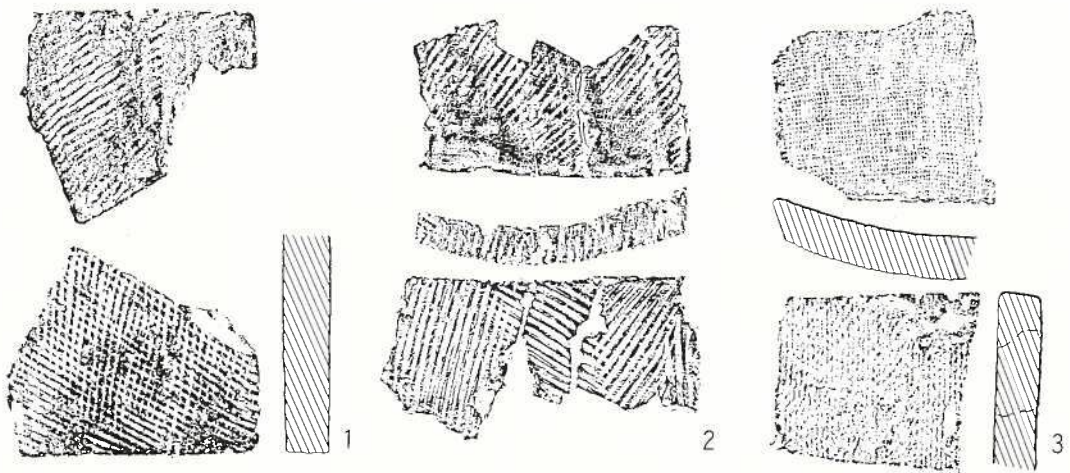
分割 分割載線を入れる前の目安の刻線を、凸面に残すものがある。分割突帯の例は確認できなかった。

側・端面の削り調整 側・端面とも、面全体及び面と接する凹面側を調整するものも多く平瓦と同様である。

〈分類〉

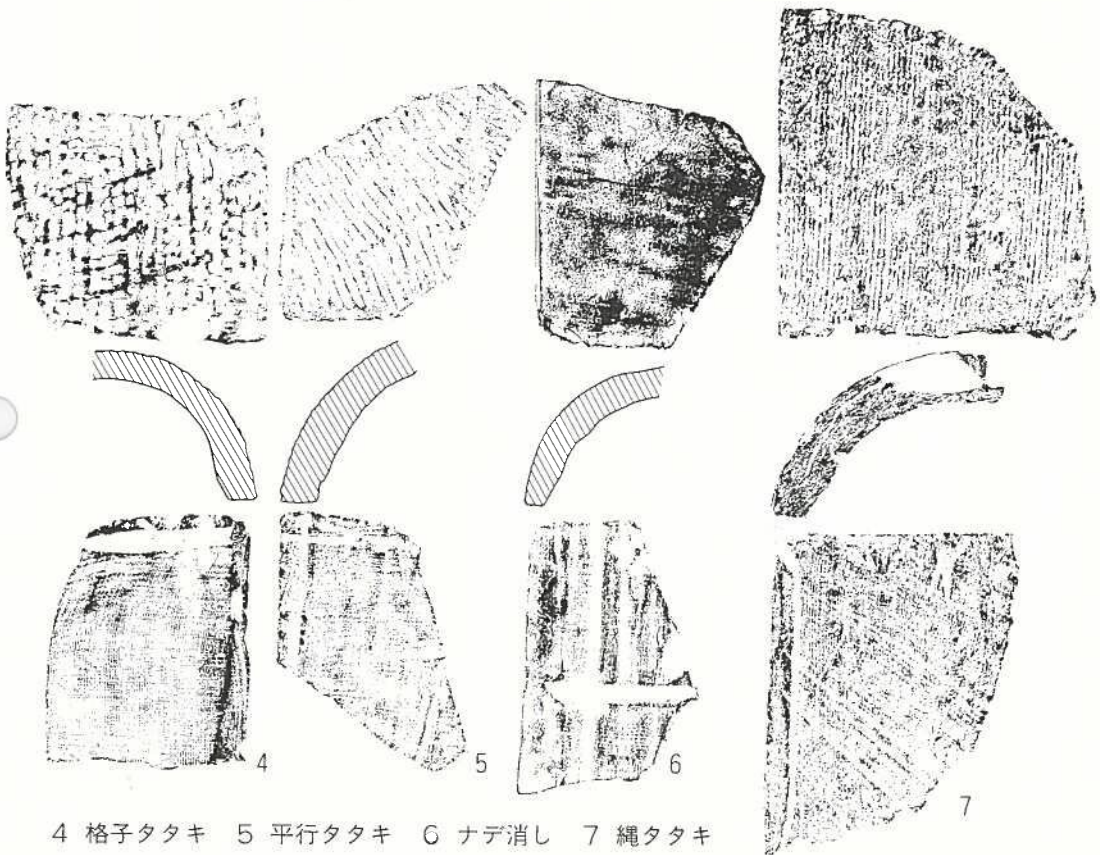
丸瓦の分類にあたっては、行基葺と玉縁付を大区分とし、木型と桶型別や凸面タタキ別を細区分とすることが妥当と思われた。しかし、広端側では行基玉縁の区別が難しいこと、木型桶型別は数量等に再確認の余地があること、更にタタキ目はナデ消していることから現状では困難である。ここでは、見通しを含めて仮に以下の3分類としておく。

I 行基葺・木型・ナデ消し II 行基葺・桶型・ナデ消し III 玉縁付・木型・ナデ消し (縄タタキ)



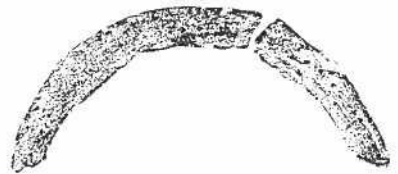
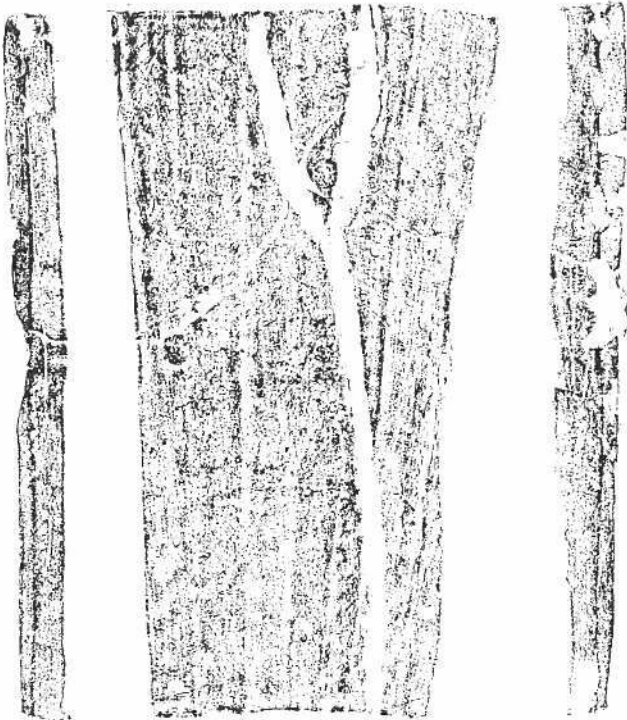
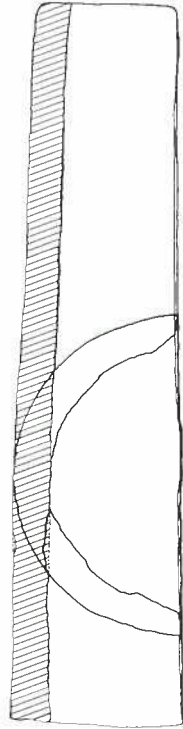
- 1 凹凸面平行タタキ
- 2 凹凸端面平行タタキ
- 3 粘土紐の可能性のある平瓦

第6図 出土平瓦 その2 (1:4)



- 4 格子タタキ
- 5 平行タタキ
- 6 ナデ消し
- 7 縄タタキ

第7図 出土丸瓦 その1 (1:4)



第8図 出土丸瓦 その2 (1:4)

軒平瓦

<分類>

軒平瓦は破片ながら135片出土した。分類は過去の出土瓦も考慮して、表7のように行った。尚、一枚作りの平瓦部を持つ軒瓦はない。

I 五重弧文 簾状の押引きが特徴。出土した軒瓦の95%を占める。段顎凸面部は丁寧にヨコナデされている。平瓦部凸面のタタキによってa平行・b格子に細分するが、bは1点を確認(第11図3)したにすぎない。aは更に、須恵器のよう

な焼きの硬質(第9図)と、表面が黒く焼けた瓦質の軟質(第10図)に分けられる。後者は前者に比べ簾状の節の間隔も狭い。製作手順を復元すれば、以下のようになろう。

1: 布を被せた桶に粘土板を巻きつける(布目の密度は平瓦の平行・格子タタキの傾向と同じ=表8)。2: aはタタキを施す前に、bは凸面を叩いてから、顎との接合部に刻みを入れる(第11図1・2・3)。3: 顎部を接合し叩き締める。4: 瓦当面・顎部凸面を(bは瓦当面のみ)ヨコナデ。5: 瓦当面に型による簾状の押引。6: 桶をはずす。7: 分割(分割突帯による界線の残るもの有り)。8: 側面・端面のケズリ調整。

尚、重弧文の型の痕跡が凹面の布目にまで至っている例(第10図9等)もあり、瓦当への施文が6と7の間、或いは分割後の可能性も残る。今後の検討課題としたい。

II 五重弧文(第11図4) Iと同様に簾状の押引であるが、顎部凸面には格子タタキが残る。

又、顎の幅もIが平均54mmであるのに対し、83mmと大きく異なる。1点出土。

III 四重弧文 簾状にならない重弧文。今回の出土はないが、瓦礫舎『古瓦譜』に拓本あり。

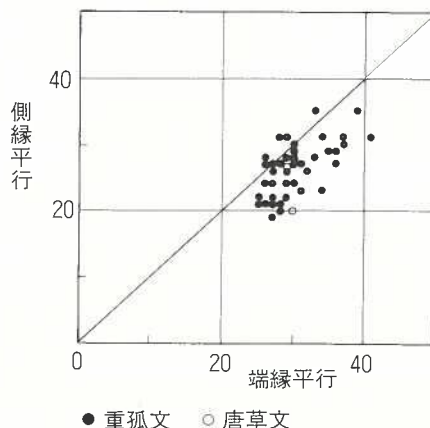
IV 四重弧文(第11図5) 3本の沈線による施文で、簾状にはならない。顎部凸面には縄叩きが残る。1点だけではあるが今回初めて出土した。

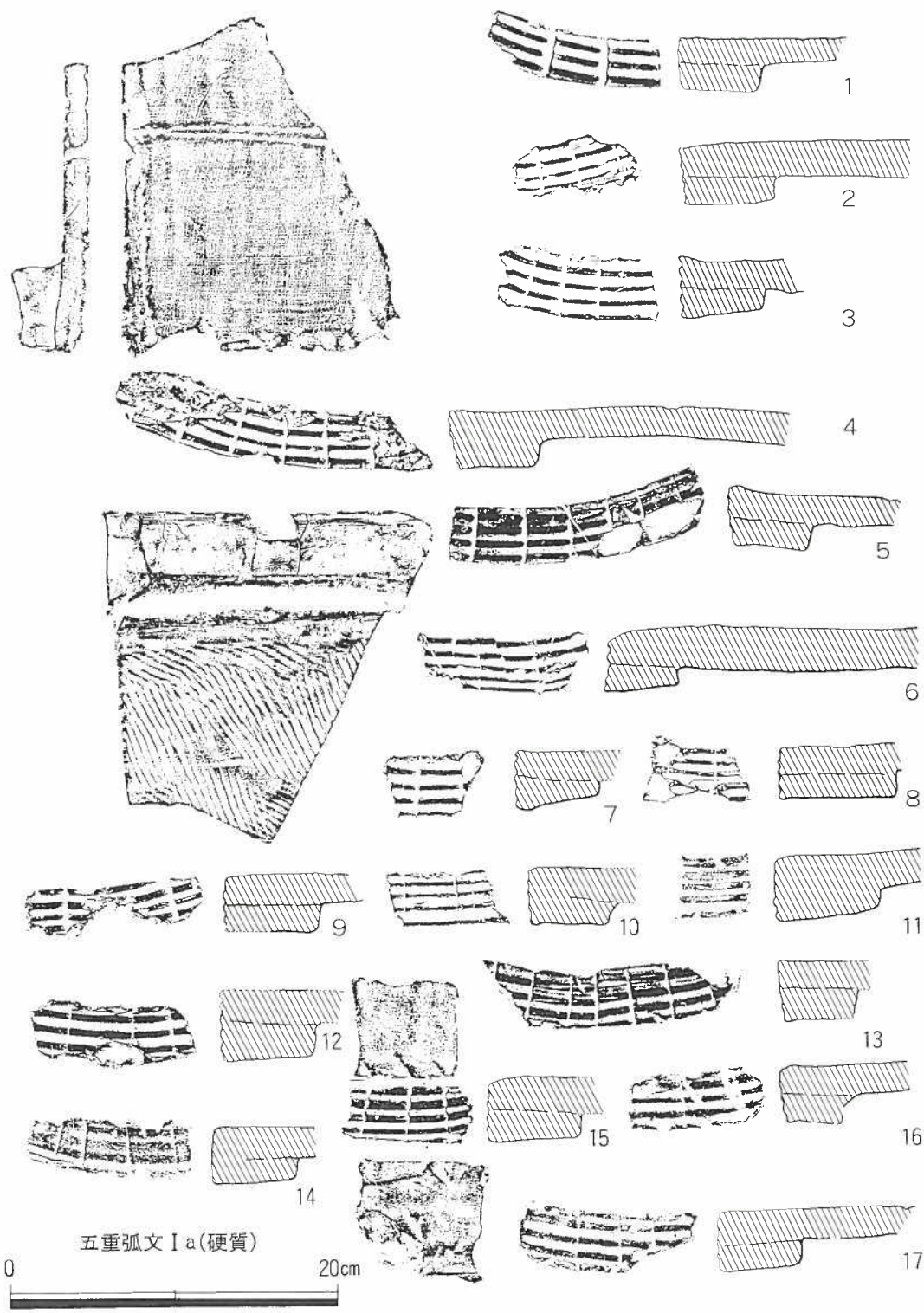
V 均整忍冬唐草文(第11図6~8) 今回は破

表7 軒平瓦分類表

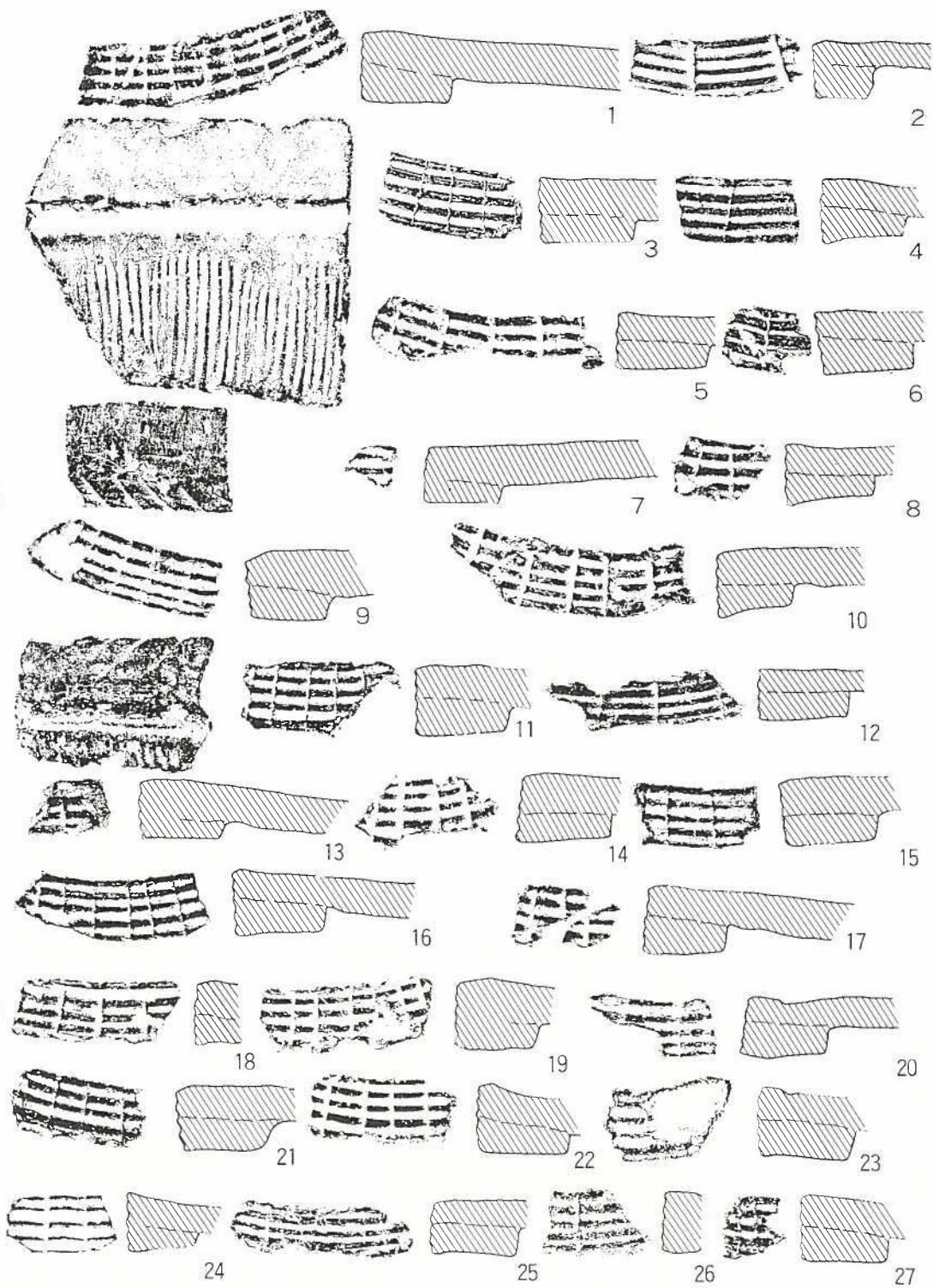
文様	顎	文様構成	顎凸面調整	平瓦部凸面	型式	比率
重 弧 文	段	五重簾状	ヨコナデ	平行タタキ	I a	95%
				格子タタキ	I b	
		タタキ(格子)	格子タタキ	II	0.7%	
		四重	?	?	III	5次出土なし
唐 草 文	直 線	均整忍冬 唐草	格子→縄タタキ	縄タタキ	V a	4%
			?	?	V b	5次なし

表8 軒平瓦凹面布目密度





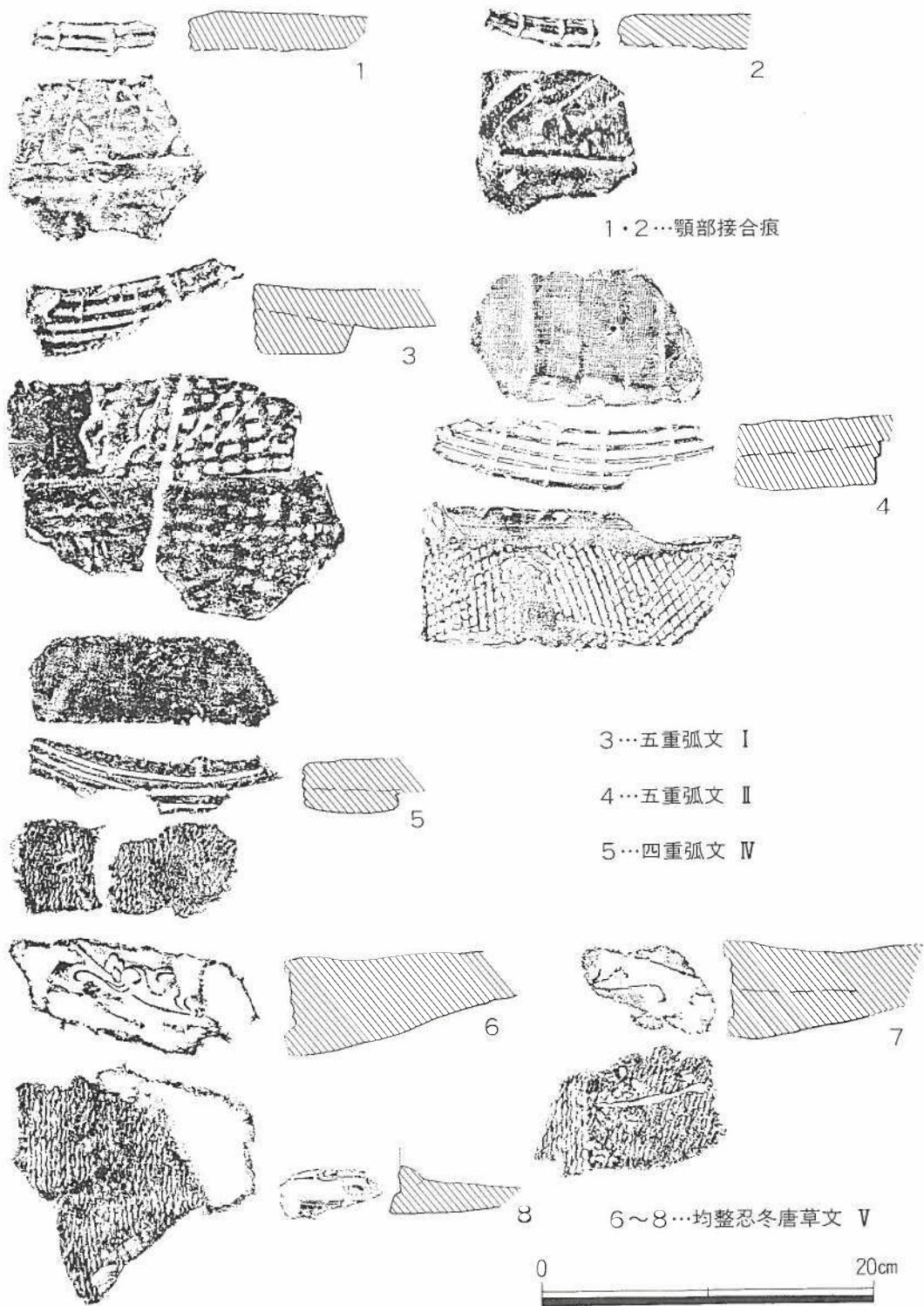
第9図 出土軒平瓦 その1 (1:4)



五重弧文 I a(軟質)



第10図 出土軒平瓦 その2 (1:4)



第11図 出土軒平瓦 その3 (1:4)

片のみ4点出土。上下には外縁があるが、側縁は適当な位置でカットされ外縁はない。分割前に範による施文が行われたと考えられる。忍冬文は中央飾りから2単位しか反転しないようで、第1結節に蓄みをもつことを大きな特徴とする。直線顎で、凸面は格子タタキ→縄タタキの重複タタキが認められる。焼成・色調はIと異なり、須恵質や黒い瓦質のものは無く、黄灰～赤褐色を呈した良好な焼きである。

尚、中心飾りの異なる忍冬唐草文の拓本が、石田茂作により瓦礫舎蔵として紹介されている。これをVb、前記をVaとしておく。

表9 出土軒平瓦の特徴（基本）

型式	高さ (cm)	顎幅 (cm)	顎高 (cm)	布目数		焼成	色調	胎土	破片数	比率 (%)
				側	端					
I	3.7	5.4	1.5	26	30	軟	暗灰	密	126	95
II	3.9	8.3	2.7	22	29	硬	浅橙	密	1	0.8
IV	2.6	5.6	0.8	22	27	良	灰白	密	1	0.8
V	5.7	なし	なし	23	30	硬	赤褐	密	5	4

〈参考〉



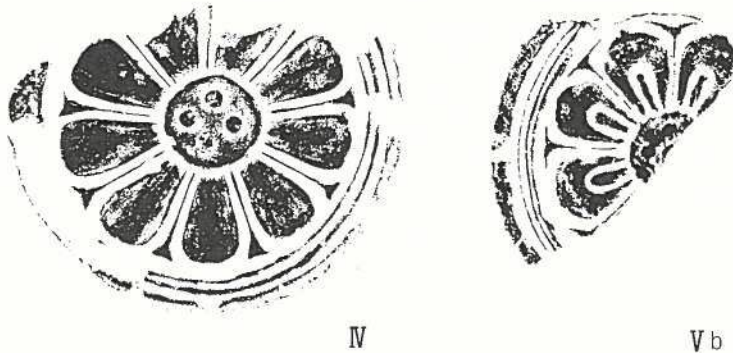
第12図 二次調査出土の軒平瓦 (1:4)

軒丸瓦

〈分類〉

軒丸瓦は外縁部分だけのものを含めて78片出土した。分類は過去の出土瓦も考慮して、表10のように行った。

〈参考〉



第13図 二次調査出土の軒丸瓦 (1:4)

I 素縁単弁 8 弁蓮華文(第14図 1) 1

点出土。低い半球状の中房と、間弁の
 範キズに特徴がある。蓮子は焼成前も
 しくは焼成中に剝離している。

II 素縁? (第14図 2) Iと同様素縁
 単弁の蓮華文と思われるが、素縁部と
 間弁だけが残った1片のみで、子細は
 不明である。I に比べ外縁・間弁とも
 に厚い。

III 重圏縁単弁 8 弁蓮華文 (第14図
 3~15) 出土した軒丸瓦の半数を占め
 る。中房は小振りではあるが円筒状で、
 1 + 6 の蓮子が配されている。「T」字
 形の間弁も I に比べシャープで、中房
 につながっている。須恵器のような硬
 質のもの、外面黒色の瓦質のもの、白
 色の軟質のものがある。

IV 重圏縁単弁 9 弁蓮華文 (第13図 左)
 2 次調査出土。今回の出土はない。

V 重圏縁単弁 8 弁蓮華文 (第15図 1~ 3) 弁内に単子葉を配す所謂「山田寺式」。破片の
 み 3 点出土した。幅の広い外縁部が特徴的である。焼成は外面黒色の瓦質のものに限られ
 る。又、同じ重圏縁単弁 8 弁蓮華文ながら、弁内の単子葉の表現が沈線によるものがII次
 調査で出土している (第13図 右)。これをV bとし前者をV aとする。

表10 軒丸瓦分類表

文様	内外区	内区	外区文様	弁内	弁数	蓮子	型式	比率 (%)				
蓮花文	外区のみ	単弁	素縁文	無子葉	8	剝離	I	3	5			
				?	?	?	II	3				
			重圏文	無子葉	8	1+6	III	51	74	5次なし		
				9	4	IV	-					
				単子葉	8	1+5	Va	8				
					1+(4)	Vb	-	5次なし				
			バレット	6	1+6	VI	15					
			複弁	鋸歯文	複子葉	8	1+8+8	VII	21	21		
			内外縁	単弁	内縁珠文	無子葉	12	1+4	VIII	-	-	5次なし
			他	外区	宝相花文	重圏文	-	-	1+2	IX	-	-

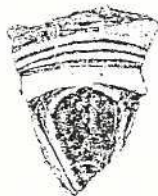
表11 出土軒丸瓦の特徴 (基本)

型式	直径 (mm)	内区 (mm)				外区 (mm)		焼成	外面色調	胎土	破片数	比率 (%)	
		内区径	中房径	蓮子数	弁幅	外区広	外縁高					外縁別	
I	(18)	(15.2)	4.0	剝離	3.5	(1.2)	1.3	硬	灰褐	ち密	1	3	5
II	-	-	-	-	-	1.9	1.3	硬	暗灰	密	1	3	
III	-	16.8	3.9	1+6	3.9	2.7	1.3	軟	暗灰	密	20	51	74
Va	-	-	-	-	3.2	3.5	1.3	軟	暗灰	密	3	8	
VI	19.7	14.5	4.1	1+6	4.6	2.4	1.4	硬	灰	密	6	15	
VII	-	-	-	-	3.9	1.0	なし	硬	浅黄橙	密	8	21	21



1. 素縁単弁蓮花文 I

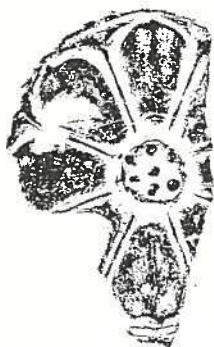
2. 素縁 ? 蓮花文 II



3

4

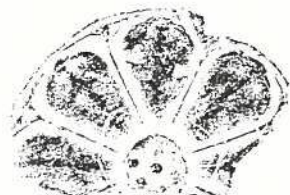
5



6

7

8



11

12

10



13

14

15

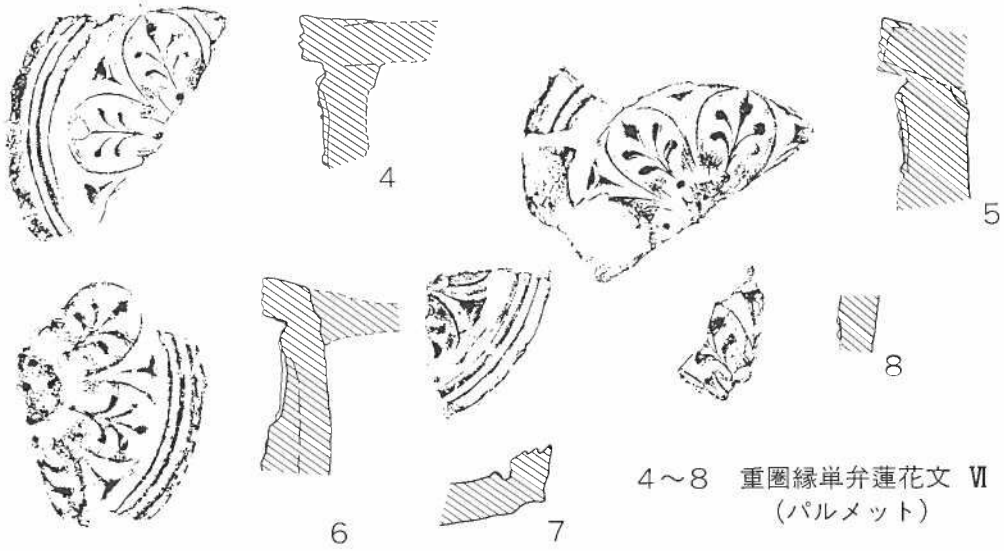


3~15 重圏縁単弁蓮花文 III

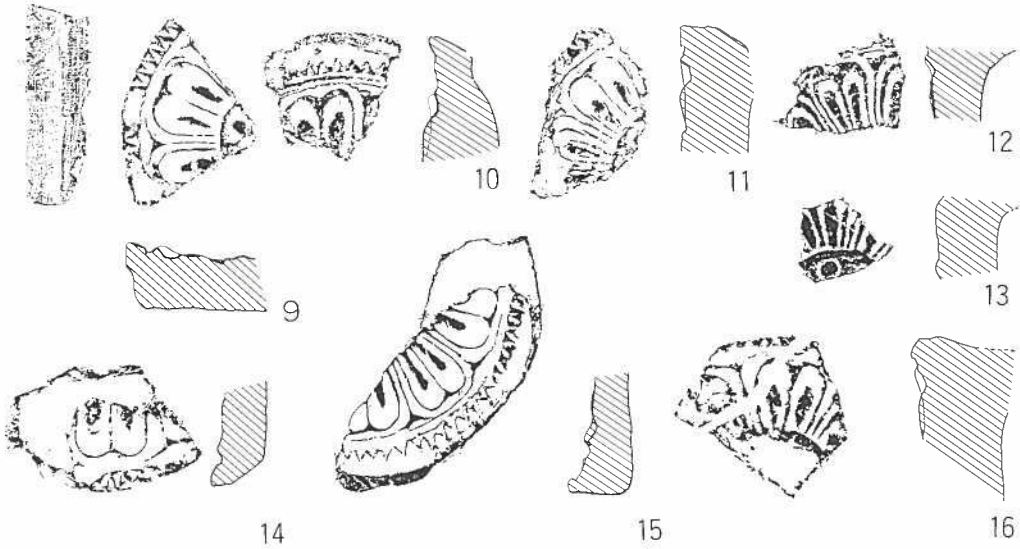
第14図 出土軒丸瓦 その1 (1:4)



1~3 重圏縁単弁蓮花文 Va

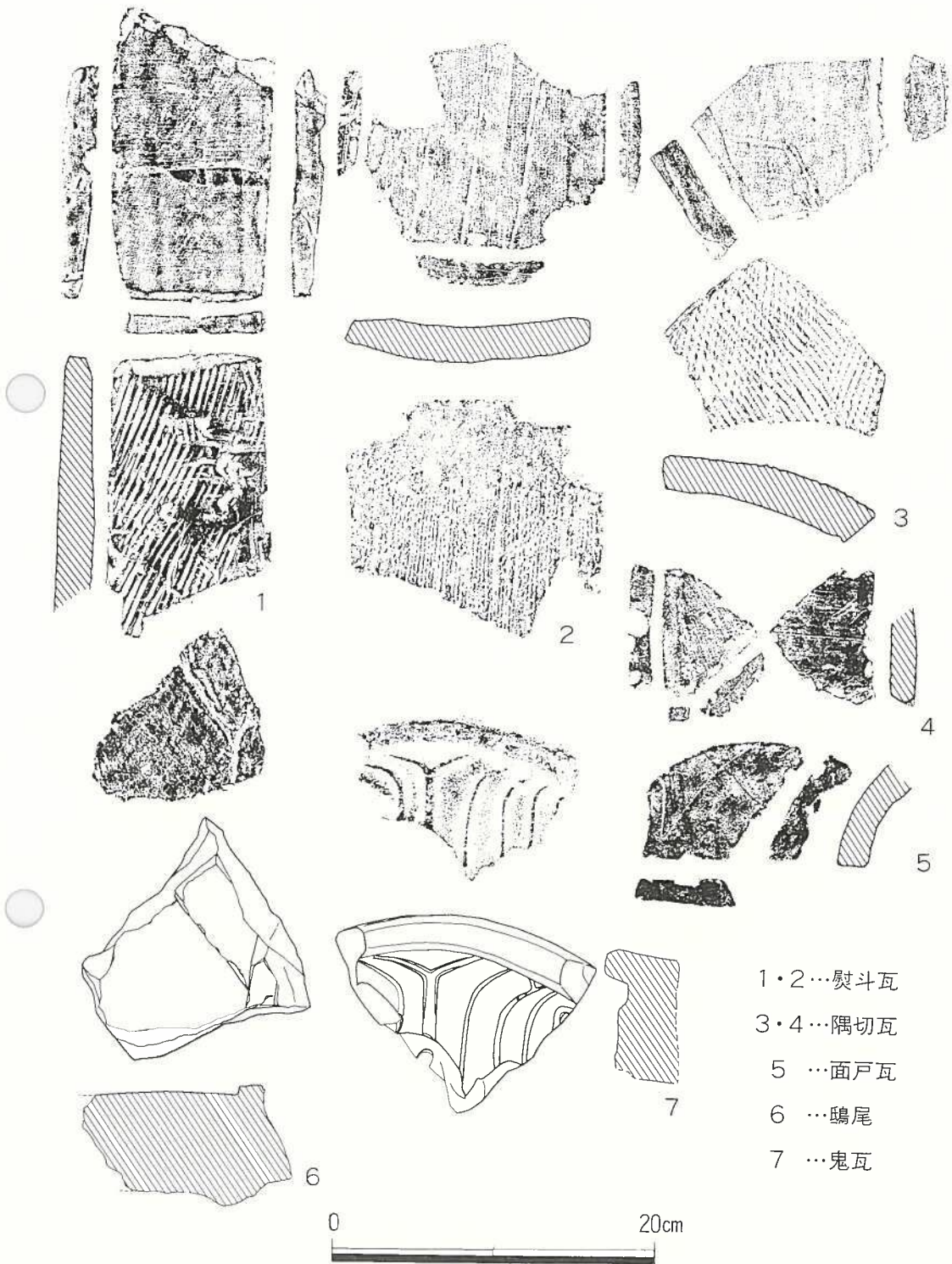


4~8 重圏縁単弁蓮花文 VI
(バルメット)



9~16 鋸齒文縁複弁蓮花文 VII

第15図 出土軒丸瓦 その2 (1:4)



第16図 出土道具瓦 (1:4)

Ⅵ重圈縁単弁6弁蓮華文(第15図 4~8) 弁内にパルメット文を配す、大阪野中寺と同
範瓦。間弁はクサビ状で、中房にも弁にも接せず独立している。中房の周縁には細かな刻
み目があり、特徴的である。今回の出土品では須恵器のような硬質のものと、白色の軟質
のものがある。

Ⅶ鋸齒文縁複弁蓮華文(第15図 9) 鋸齒文は面違い。破片だけしか出土しておらず、し
かも弁の幅が一定しないため弁数は不明であるが、『古瓦譜』の拓本から8弁と考えられ
る。須恵器のような硬質のものと、灰白色の軟質のものがある。

Ⅷ珠文縁単弁12弁蓮華文 外区が内外縁に分れるもので、発掘による出土はない。若宮瓦
窯で焼かれ、尾張国分寺でも使用されている。

Ⅸ宝相花散文 今回の出土はないが、4次調査で出土している。

道具瓦

熨斗瓦(第16図 1・2)

焼成前にカットされたもの15点を確認した。凸面のタタキ別では平行タタキ8点・格子
タタキ2点・縄タタキ4点(うちハナレ砂有り3点)である。幅の計測からは、73~82mm
4点・95~102mm 6点・112~123mm 3点・150mm以上2点と一応のまとまりがみられた。

隅切瓦(第16図 3・4)

焼成前に隅を斜にカットした平瓦で、4点確認した。凸面のタタキ別では平行タタキ
1点、格子→平行の重複タタキ1点、ナデ消し2点であった。

面戸瓦(第16図 5)

可能性のある瓦片1点を確認した。カットは一方が焼成前、一方は焼成後である。焼成
後のカット面に添ってはカットする目安の刻線が観察できる。

鷗尾(第16図 6)

縦帯から鱗の一部が残る破片1点を確認した。シャープな沈線とヘラケズリによって段
型をつくりだしている。外面灰白色、内面白色を呈し、焼成は良好、胎土は緻密である。

鬼瓦(第16図 7)

アーチ型の鬼面文鬼瓦の頂部と思われる。端部の丸い外縁部と紐状の巻き毛、釘穴が残
る。他の瓦には見られない胎土で、1mm以下の砂を多量に含んでいる。

その他の瓦

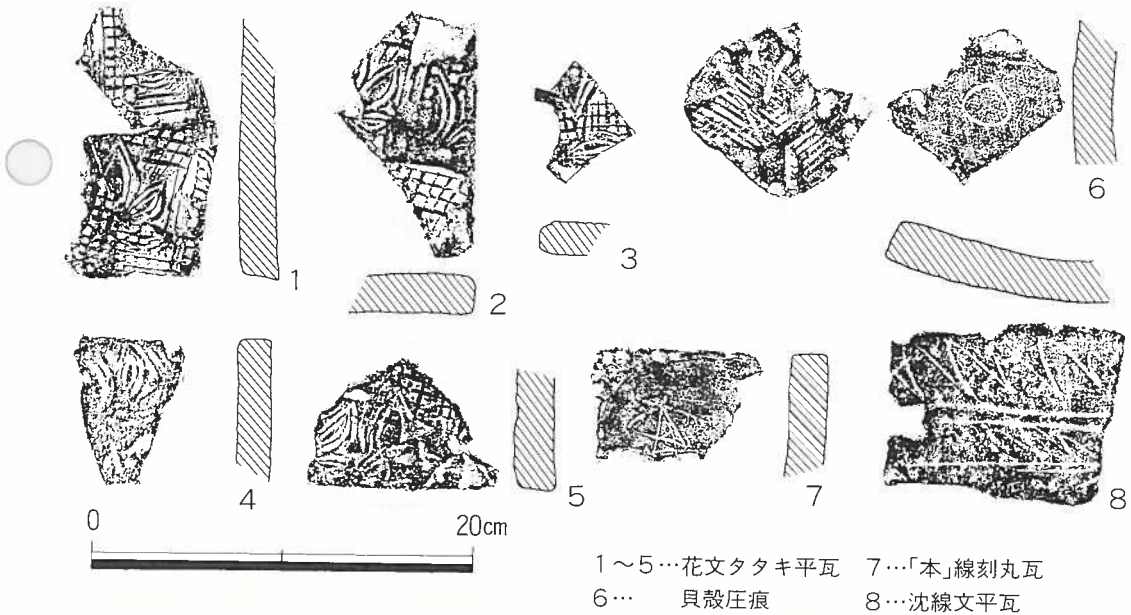
第17図 8の平瓦は、凸面に平行・波状の沈線文を施す。タタキはヨコナデにより消され
ている。接合資料はないが、簾状重弧文軒平瓦の平瓦部と推定される。

第17図 1～5は花文（横から見た蓮か？）タタキの平瓦で桶巻き作りによる。格子と花文は別々でなく、同じ叩き板に彫り込んでいる。黄灰～赤褐色を呈す。

第17図 6は凹面に貝殻（シジミガイ科か？）の圧痕をとどめる平瓦。凸面は平行タタキ。1点だけの出土で、記号とは考えがたい。

第17図 7は「本」と焼成前凸面にヘラ書きされた丸瓦。

この他、今回図示していないが多くの瓦破片が出土している。



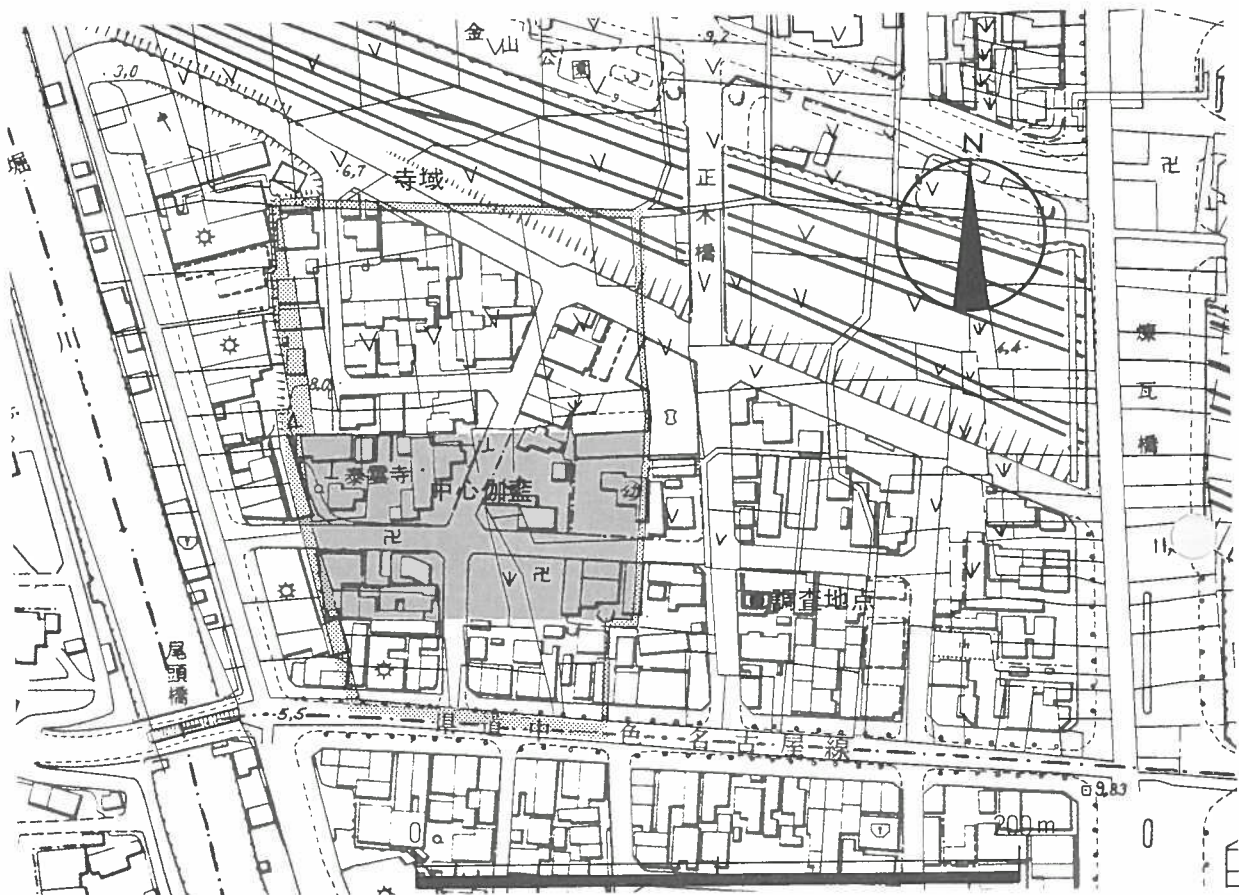
第17図 その他の瓦類 (1:4)

III. まとめ

今回の調査は、緊急的な小規模の調査であったにもかかわらず、寺院建立前後の遺構や、多量の古代瓦を検出することができ、大きな成果を得た。全面調査ができなかったことが重ねて悔やまれる。以下、十分な検討を経てはいないが今回の調査で知り得たことや、今後の検討課題を列挙することでまとめにかえたい。

寺域について

寺院に関する直接的な遺構は検出できなかった。しかし、今後の調査の足掛かりとするため、推定の寺域を提示しておく。第18図は、明治17年の地籍図（「尾府名古屋図」蓬左文庫地図複製よりトレース）から寺域と中心伽藍の位置を想定し、昭和46年の「名古屋都市計画基本図」に投影したものである。ここで推定した範囲は石田茂作の見解とも一致するものであり、その規模や古代瓦の分布状況からも大きく違えることはないと考えられる。



第18図 推定寺域 (1:2500) ※地籍図のトレースは伊藤厚史氏による

遺構について

検出した遺構は変則的な調査区のため、残念ながらすべて断片的である。時期やその性格を確定できたものも少なかったが、そのなかで、竪穴状遺構と溝＝SD01は注目された。

竪穴状遺構については、寺院創建期を前後する頃の竪穴住居と考えるのが最も妥当と思われた。しかし、寺院建立前の集落の跡か、寺院建立に携わった人々の住いの跡なのかなどの検討は今後の課題である。SD01は、竪穴状遺構を切ることと、中世の遺物を含まないことから、寺院と併行する時期が考えられた。第18図で推定したように寺院に直接関わるとは考えがたいが、寺域に規制されている可能性はあり、間接的に寺院復元の手がかりになろう。

瓦について

1. 各瓦の組合わせ

瓦各種で最も高い比率の組合わせは、平瓦Ⅰ（桶巻き作りの凸面平行タタキ）丸瓦Ⅰ（木型成形行基葺の凸面タタキナデ消し）軒平瓦Ⅰ（簾状押引の五重弧文）軒丸瓦Ⅲ（重圏縁単弁8弁蓮華文の無子葉）である。量的な比率の高いものを創建時の瓦とするならばこれ

らの組合わせが最も妥当であろう。

又、比率及び共通する製作技法や焼成・色調から瓦の組合わせを考えれば表12のようになる。これらの3グループは、時期的な差と想定しておきたい。

表12 瓦の組合わせ

グループ	平瓦	丸瓦	軒平瓦	軒丸瓦
1	I・II (彫刻タタキ)	I (行基葺き・ナデ消し)	I・II (簾状重弧文)	III・Va・VI (重圏縁単弁)
2	III (縄タタキ)	III (玉縁・縄ナデ消し)	Va (均整忍冬唐草)	VII (鋸歯文縁複弁)
3	V (縄→ハナレ砂)	?	?	VIII(珠文縁単弁12弁)

2. 平・丸瓦

平瓦はハナレ砂の付着する縄タタキが一枚作りの他は、桶巻き作りであった。刻線タタキが50%以上を占め、上記のように時期的にも縄タタキに先行すると考えたい。

丸瓦は、凸面タタキナデ消しの行基葺きが主流で、玉縁付はごく僅かであった。桶型の存在も確認したが、量的な比率は再度の観察を経て示したい。

3. 軒平瓦

軒平瓦は簾状に押し引く重弧文が圧倒的で、大きな特徴となっている。簾状押し引きの類例としては長福寺廃寺(愛知)・法輪寺(奈良)・上植木廃寺(群馬)などが知られるが、ごく僅かのようなものである。そのうち実見した長福寺例は、顎部凸面に縄タタキが施されており元興寺例とは異なる。時期的なことも含め検討を要す。他例の実見を急ぎたい。

均整忍冬唐草文軒平瓦は複弁蓮華文の軒丸瓦との組合わせが考えられる。しかし、所謂「法隆寺式」とは大きく異なる文様構成で、類似する例を確認できていない。

4. 軒丸瓦

軒丸瓦は重圏縁単弁の3種(軒丸III・Va・VI)が創建時と考えられる。その内、単子葉の「山田寺式」や「パルメット文」に目を奪われるが、最も多いのは無子葉タイプで軒丸瓦全体の50%以上を占めている。又、今回初めて出土したものに素縁単弁の蓮華文軒丸瓦(軒丸I・II)がある。2点のみの出土であったが古い様相の瓦で、奥山久米寺や豊浦寺等の出土例と比較検討してみたい。

時期について

創建時期については、瓦の年代観から類推するほかは手だてがなく、これまで7世紀中葉から後半と推定されてきた。関連調査が不十分な現時点でも、見通しを述べるにとどまるが、重弧文の軒平瓦と重圏縁の軒丸瓦が盛行した時期、すなわち山田寺造営以後の、650年を前後する時期に考えるのが最も妥当と思われた。今後、軒瓦の年代観や縄タタキ出現等の時期を再検討したうえで、正報告に期したい。



1…調査風景



2…調査区東半



3…瓦だまり断面



4…SB2(南西より)



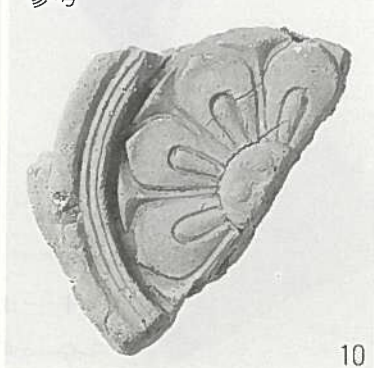
5…SD1(南より)



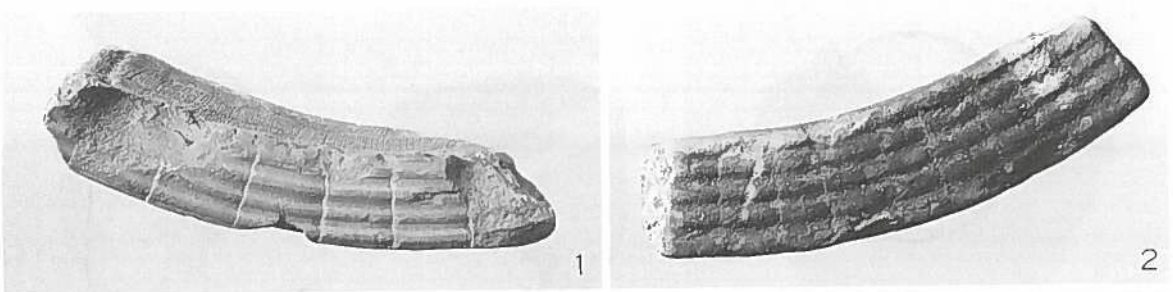
参考



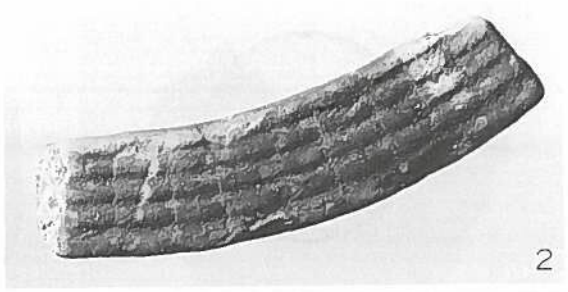
参考



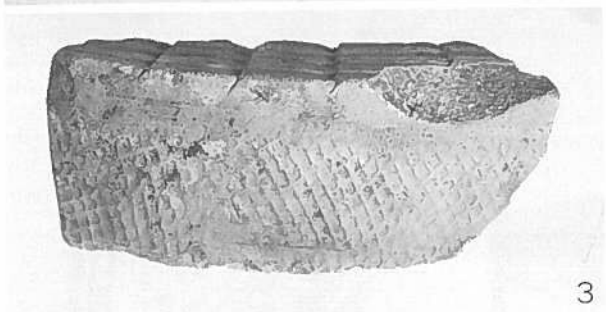
- 1…… I
- 2…… II
- 3…… V a
- 4・5…… III
- 6・7…… VI
- 8…… VII
- 9…… IV (2次出土)
- 10…… V b (2次出土)



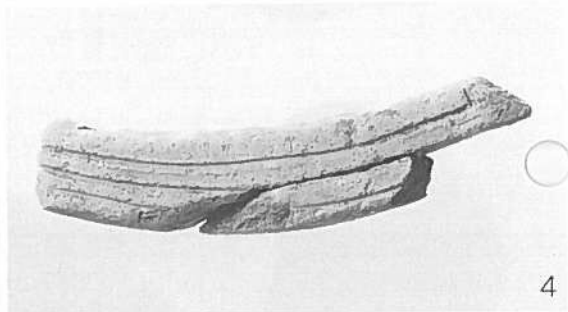
1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11

- | | |
|------------|---------------|
| 1…… I (硬質) | 7…… 鷗尾 |
| 2…… I (軟質) | 8…… 鬼瓦 |
| 3…… II | 9…… 花文タタキ |
| 4…… IV | 10…… 「本」丸瓦 |
| 5・6…… VII | 11…… 「正月」灰釉陶器 |

尾張元興寺跡
第5次調査報告書

1992年3月31日 発行

編 集	名古屋市見晴台考古資料館 名古屋市南区見晴町47番地 〒457 Tel 052-823-3200
発 行	名古屋市教育委員会
印 刷	名古屋大気堂



